

傲慢さ 社会の無関心ゆえ



1969年生まれ。立命館大卒、龍谷大で博士号(経済学)。山口県立大准教授を経て現職。専門は社会学、国際学。

にしやんたさん

羽衣国際大学教授
タレント

僕は、ウイシユマさんと同じスリランカ出身です。ウイシユマさんの母親は娘の留学の夢をかなえるために家を担保にお金を工面したと聞きましたが、僕も33年前、父が家を担保にお金を借りてくれたから日本に留学できました。境遇には似た点があります。

2005年に日本国籍を取得するまで、僕も何度となく入管に通いました。入管という空間は、言うたらなんかこう「気持ち悪い」んですよ。何も悪いことをしていない、

ビザの更新で来ただけなのに、気持ちまで汚れてしまうような。外で目にする日本人とはまるで違う。非人間的な扱いが凝縮した空間です。「入国管理」の「管理」に重きが置かれ、管理のためなら何をやってもいい、そして管理対象の外国人は「まずは疑う」という思考がセットになっているように感じます。言葉遣いが、わかりやすい例です。20年ほど前に山口県立大に赴任したとき、ビザの更新期限と発令日が重なり、

大学側の書類が間にあいませんでした。大学から入管に連絡の上で翌日に手続きし、1週間後に入管にビザを受け取りにいくと、建物に入るなり「あー、君がオーバーステイのこと職員に言われました。日本人なら「すみません、パスポートを見せてください」と言う場面でも、外国人相手だと「パスポート、パスポート、君、パスポート」です。日本語を深く学び、日本で年を重ねていくほどに、「中」と「外」の違いがはっきりと見えてきます。ウイシユマさんの遺族が名古屋入管を訪ねたとき、入管は、同行した国会議員を施設内に入れませんでした。国民の代表者でも相手にしない。大半の日本人にとっては日常生活に関係のない役所ですから、無関心の中で、こうした傲慢さ、独特の文化が温存

されてきたのだと思います。遺族は、入管に「スリランカ人だからこのような対応をするのか」と問いました。もしウイシユマさんが日本人だったなら、そして外国人だったなら、警察に出頭したときにDV被害者としてシエルターに保護されていたかもしれない。同じ外国人でも、特に非白人は、最初から不利な立場にいる上に、ちょっとしたミスで、負の連鎖がぶわっと加速してしまうのです。

日本社会には、すでにたくさん外国人が暮らし、働いています。なのに、国は「外国人労働者を受け入れ、共生社会をめざします」とは国民に呼びかけない。責任を取ろうとしないと感じます。国として外国人とどう向き合うのか。その指針を示す必要がある。外国人と日本人と一緒に社会をつくっていくんだという、多文化共生の礎となるような法律をつくるべきです。(聞き手・荒ちひろ)

2021年7月7日付朝日新聞朝刊記事 耕論「入管は変わるか」
承諾番号：21-2386
掲載期間：2021年7月8日から1年間
朝日新聞社に無断で転載することを禁止します。